

へい わ ちか 平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。

わたしが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前^{まえ}の日常^{にちじょう}がうばわれています。

ぼろぼろになった制服^{せいふく}。

黒く焦げたお弁当箱^{べんとうばこ}。

それは、当たり前^{まえ}の毎日^{まいにち}を生きていた証^{あかし}です。

昭和20年^{しやうわねん}（1945年）8月6日、午前8時15分^{がつむいか ぜん じふん}。

たった一発の原子爆弾^{いっぱつ げんし ばくだん}が、人々の暮らしを、人生を地獄^{じごく}に変えました。

髪^{かみ}は焼けちぢれ、全身^{ぜんしん}の火^ひぶくれが破れ^{やぶ}、火傷^{やけど}した皮膚^{ひふ}が垂れ下がった人々^{ひとびと}。

「痛いよ。苦しいよ。」

「助けて、お母さん。」

「死にたくない。」

「助けてあげられなくてごめん。」

死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像^{そうぞう}することさえ恐ろしいことです。

私^{わたし}たちには、被爆体験^{ひばくたいけん}を直接聴^{ちよくせつ き}くことができる最後の世代^{さいごのせだい}として、

当時の記憶^{とうじのきおく}を事実^{じじつ}として受け止める使命^{しめい}があります。

目をそらさず、知ろうとすること。

悲しい現実^{かなげんじつ}でも向き合うこと。

そこには、「生きたかった人々^{ひとびと}」、「生き続けた人々^{ひとびと}」の思いがあります。

私^{わたし}たちには、広島^{ひろしま}のこどもとして、行動^{こうどう}する責任^{せきにん}があります。

相手の気持ち^{あいてのきもち}を想像^{そうぞう}し、意見^{いけん}の違い^{ちが}があっても認め^{みと}め、受け止めること。

平和への思いを、自分^{おれ}なりの方法^{ほうほう}で表現^{ひょうげん}すること。

一人一人^{ひとりひとり}の小さな行動^{ちいさなこうどう}が、平和への後押し^{あとお}となります。

へい わ だれ
平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中^{せかいじゅう}の人々^{ひとびと}で創^{つく}り上げるものです。

こどもである私^{わたし}たちも、その一員^{いちいん}として平和への一歩^{いっぽ}を踏み出します。

かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望^{たしかなきぼう}を、未来^{みらい}へ届^{とど}けるために。

れい わ ねん
令和8年（2026年）8月6日

こども代表
ひろしましりつたかすしやうがっこう
広島市立高須小学校
ひろしましりつこうなんしやうがっこう
広島市立高南小学校

ねん かきざき ゆ う
6年 柿崎 由宇
ねん こう の かず き
6年 河野 和希